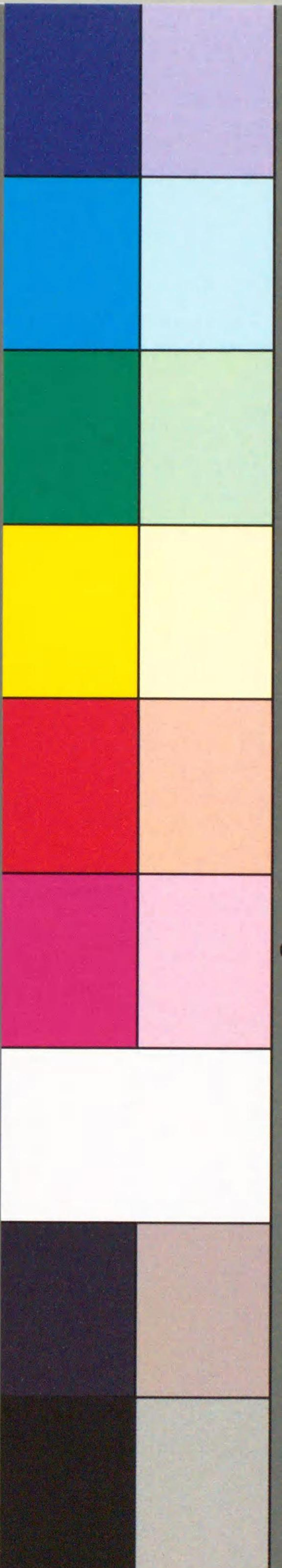


Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

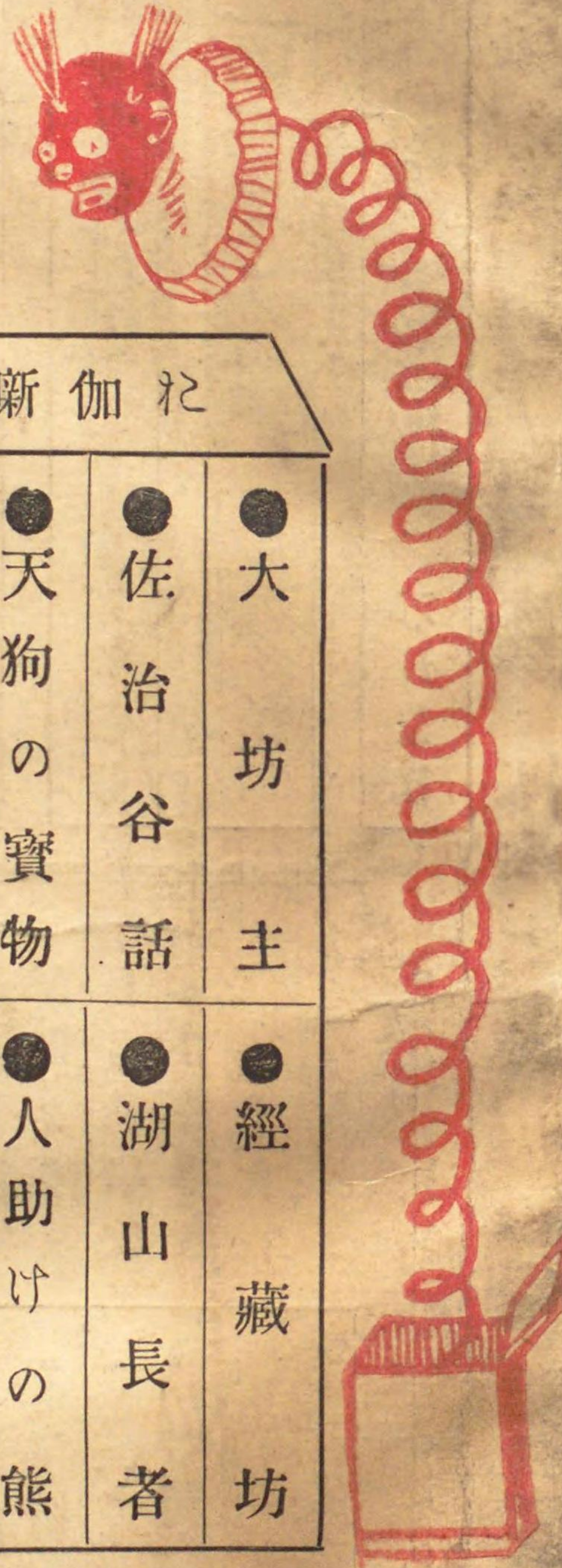


特45
876

特45-876
1200500892767

因伯昔話
国立国会図書館

因伯昔話



編壹拾噺伽祀

● 神話	● 盗人の悔悟	● 祀とん女郎	● 天狗の寶物	● 佐治谷話	● 大坊主
● 因幡の白兔	● 慾張り爺	● 種ヶ池物語	● 人助けの熊	● 湖山長者	● 經藏坊

267
351

○郷土模範人物

(昔の巻) 拾五錢 送代貳錢

○郷土立志人物

(今の巻) 不日發行

○鳥取市街地圖

五代貳錢 送代貳錢

○縣下の現状

參拾錢 送代貳錢

○隱徳太平記

特價壹圓八拾錢 送代十六錢

○因伯昔話

〔十壹篇〕 十一錢 送代貳錢

○イナキバ話の種

不日發行

○郷土地理と歴史

拾貳錢 送代貳錢

○小學校自修用鳥取縣地理

不日發行

最新版 貳版豫告

入學試験及第準備書

定價參拾五錢 送代

附録 (優等生勉強法)

- 鳥取師範學校
- 鳥取商業學校
- 鳥取中學校
- 鳥取高等女學校
- 倉吉中學校
- 倉吉農學校
- 米子中學校
- 米子高等女學校

各學校實際ノ試験問題ニ一々解答ヲ付ケ競争試験準備獨習ト應用力養成ノ爲ニ發行セシモノニシテ願書式并ニ應用問題アリ實ニ善良ルナ本デアルトハ本書ニヨリ入學セシ人々ノ好評也

特45 876

因伯昔話

◎大坊主

因伯史話會選著

4410.30 内交

因幡國徳尾の森といふがあります、こゝには其昔相撲で有名であつた野見宿彌が祀つてあるのであります、さて徳尾の森といふのは老木が生ひ茂つて居て晝も暗いばかりであります、晝さへ物凄い所であれば夜などは一層物凄、誰いふとなく徳尾の森からお化か出ると云ふ評判も高くなりまして、でありますか、心夜などは此森へ行くものがあ、もし夜の十二時過ぎて一時二時頃に此森を三度まはると屹度何か化か出ると云ふ、ほん

大坊主

い噂はますく、高くなつて徳尾の森はますく、物凄いの所となつて了ひました。

こゝに鳥取藩に羽田半彌太といふ荒武士がありました。徳尾の森から大坊主の化が出るといふことを聞いて一つ其正体を見現はしてやりたものだ。又運よくばこれを退治てやらうと考へました。そこで或日の夕方から我家をブラリと出掛けまして徳尾の森の附近まで来ました。と見ればそこに一軒の茶店があります。半彌太は其茶店を叩き起して

「御亭主、一つ夕飯を畢はして貰はうか」

と這入り込みました。亭主は力強さうな半彌太をつくぐと見てゐましたが「此夜陰に何處へた出になりますか」と聞きました半彌太は

「イヤ徳尾の森で大坊主とやら、化とやらも出るさうだから其正体を見届けて来うと思ふのだ」

と答へると、亭主は「それは結構な事で御座います、此節はお化が出るといふので女子子供、大人までも恐れ込んでます、貴殿の力力で化を退治下さるなら人々の幸福此上は御座いません。どうか御大切に遊ばしませ」と、親切に申しました。半彌太は此茶店で、したゝかた腹をこしらへ亭主に別れをつげて出て行きました。亭主は「化を待つてゐます、どうか御無事でも一度此茶店に御立寄り下さい」と、門を出て半彌太を見送りました。

半彌太は茶店を出てしづくくと森の方へ近附いて行きました。夜はだんく、深くなり木々の梢の風になる音がヒューと物

凄く鳴つてゐます。半彌太は何にしても剛膽な武士でありますから少しも恐れませんが、森の入口まで来てキツト森の奥を睨め上げます。山のやうな森は眞つ黒に聳えてゐます。半彌太は静に歩調をとつて石の段を一つ上り二つ上りだんく奥深く這入つて行きます。しかし何にも出て来る様子はありません。大分奥深くまで進み入りましたが少しも變つた事はありません。

半彌太は、そこの石に腰を下して

「何だ馬鹿くしい化かんか少しも出て来ない」

と獨言を言つてゐました。ところがサツト怪しい風が吹くと不思議不思議突然に出て来た半彌太も一寸は驚きました。少しも恐れませんが、大坊主だ、丈は雲つくばかり高く眼は爛々と光つてゐます。半彌太は見上げ見下して、さても不思議なものか

あるものだと、化と相對つてゐました。化も半彌太が恐れなから張合がないと思つたかしらんが搔き消すごとく消へて失くなりしました。

半彌太は化物を見届けた。此上は歸らうと思つて森を出てもと来た道にひき返しました。が來がけに立寄つた茶店のことを思ひ出し茶店に立寄りまして

「亭主、歸つたぞ」

「お歸りなさいましたか、御無事で結構で御座いました。して化物は出まして御座いますか」

「出たよ」

「どんか化物でございました」

「大坊主であつた」

「どんな坊主で御座いましたか、こんな坊主でしたか」と亭主は手を擴げて坊主の眞似をしました。

「もつと大きな坊主であつたよ」

亭主はそれを聞いてゐましたが、自分も直ぐに大坊主になつて

「こんな坊主でしたか」

と云つた、半彌太が亭主を見ると亭主ではなくて徳尾の森で見
たよりは一層大きな恐ろしい大坊主であつた。森の中で大坊主
に會つて驚かなかつた半彌太も今此亭主の大坊主を見て吃驚仰
天しました。

多分此茶屋の亭主は徳尾の森のれ化であつたのでありませう
其後茶屋も亭主もありませんでした。

◎ 佐治谷の話

今は昔八頭郡佐治谷といふ山奥の村がありました。此處の人
は至つて正直でありましたから時には正直すぎて馬鹿正直であ
つた事もあつたのであります。

ある佐治谷者の親類に不幸がありました。其葬式をせねばならぬ
と云つて種々と手配をしてゐました。佐治谷者の與太は親類の
ことでありましたから早速手傳ひにと急いで其家に來ました。其
家では大層喜んで「與太さんよく來て呉れた。早速だが寺へ
行つて和尚さんに親が亡くなりましたから佛事萬端よろしく
頼みますと願つて來て呉れ」
「よるゝい。しかと和尚さんは寺の
何處にゐられます」
「和尚さんは寺に入ると少し高い所があるだ

らう其處に居られるワイ」

與太はテク〜寺にやつて参りますと本堂の高い棟の上に烏が止まつてゐます。與太はこれが和尚さんだナ。黒い法衣を着てゐるワイと思つて「和尚さん、親が亡くなりましたから佛事萬端よろしく頼みます」と云ふと、烏は「子カア 子カア」と云つて啼きます。「子ではない親で」と與太が云ひますと相變らず「子カア子カア」と云つて啼きます。與太は仕方ありませんから歸つて此事を話しますと

「それは和尚では無い、烏と云ふ鳥だ。仕様が無いナ 二階から酒壺を下して呉れ」

與太は二階から酒壺を持つて階子を一段下りると、酒壺「トプトプ」と云ひます。與太は「跳ばないでもよろしい」と云つて

又一段下りると「トプトプ」と云ひます「とばないでもよろしい」又一段下りると「トプトプ」與太は「そんなに跳びたけりや跳べ」と云つて、手を放しましたから大變、壺は破れて、そこら酒一ぱい「仕様の無い 與太さんだナ 飯を焚いて頂戴」と飯を焚かせました。與太は竈の前に坐つて釜の下を焚いてゐましたか「クダクダ」云つて煮え出しました。與太は恐り出して「食ふものか食ふものか」と云つてゐます。釜の中ではクダ〜と云ふ 與太は「食べはしない食べはしない」と云つて喧嘩をしてゐます。

あゝ與太さん喧嘩はよして風呂の下を焚いて貰はうか
與太は風呂の下を見たが薪がない「何を焚きませうか」と聞くと「何でもそこらにあるものを焚いて下さい」との事であつた

與太はそこらにあつた下駄、傘、手桶までも焼いて了ひました。に膳を差上げることに仕様といふので、奥の間で和尚を上座に與太も相伴といふので、ズラリとに並びました。與太はこんな膳に坐つた事がない。どうして食つたら可からうと心配して居ましたが、これは何でも和尚のなさる通りを真似するに限る。さうしたら間違はない。と和尚の方ばかり見てゐると和尚が箸をとつた。與太も箸を取つた。どうしたはづみか和尚のつまんだ芋が箸をすべつて座敷中をコロコロ。與太は成程と感心して芋を箸で取つては座敷中にコロコロ。又一つ取つては座敷中にコロコロと芋を座敷に散らしました。やがて佛事もすみましたので、與太もいよく佐治谷に歸ることにになりました。

其家からは御苦勞であつたと旨い團子を爲て食はせました。與太は團子を食つて見たところ、これまでに食つた事のないもので味が忘れられぬ。心のうちに歸つたら是非此ものを拵へて食つて見たいと思つてゐました。そこで其名を聞いて見ると團子と云ふことが分つた。やがて其家をお暇として歸ることになりましたが、團子といふ事を忘れてはならぬと心得て道々「だんごく、だんごく」云つて歸つて行きます。一足歩つては「だんご」二足歩つては「だんご」と云つて通つて行きました。道に一筋の溝があり、ました。これを跳ばねばならぬ。與太は精一ぱいの力を出して「ひよい」と跳んだ。跳んだだけ可かつたが跳んだ調子に團子と云ふことを忘れて了つた。ハテ何であつたやらと思案をしても思

い出せない。漸うにして「ア、ひよいであつた」と今度は「ひよい〜ひよい〜」云つて歸つて行きます「ひよい〜ひよい〜」とうとう自分の家まで歸りました
 與太は 歸るや否や 家のものを呼んで「今日は ひよいと云ふものを拵へて食はせろ」といひます。家のものは分りません。與太は「早く ひよい」と云ふものを拵へよ」といひます家のものは如何しても「ひよい」が分りません。與太は大層恐つて「ひよい が分らぬ事があるものか」とそこらにあつた火吹竹をとつて女房の頭をなぐりつけました「家内は吃驚して團子のやうな瘤が出たか」と申しますと 與太は「ア、其團子のことだ」と云ひました。

◎天狗の寶物

今は昔、伯耆國の大山の麓に、太郎といふ子供がありました生れつき博打がすきで、いつでも采ころを持つてゐました。

ある日、この太郎は大山に薪をとりに行つたのでありますが樹木の茂つた蔭の方に平地のあるのを見付けてよい休み場だと思つて大胡坐をかき、例の采ころを出して、「一が出る」「二が出た」「こんどは六だ」と獨りでしゃべりながら夢中になつて楽しんでゐます。

この時、上の方で「太郎。太郎」と呼ぶ聲がしましたので、太郎は仰向いて見ますと、こはいかに鼻の丈一尺あまり 眞白の髪をふさ〜と生

した天狗様であります、大山には天狗が棲んでおますが多分其天狗様であります、それも樹の上から呼んだのであります、太郎は、思ひがけぬ者に呼ばれましたのであつと云つて驚き地べたに身体をつけてしまひました。天狗さまは、之れ見て木から飛び下り徐かに歩いて近くへ寄り、太郎の肩に手をかけて氣の毒さうに慰さめて言ひますには

「これ太郎、何にもそんなに怖がることはないよ。お前を食ひもさらひもしないのだ。お前に少し頼みたいことがある、最前からお前の振りたてゝあるものを見ると、ほんとうに面白さうだ、どうか私に其四角なものを譲つてくれまいか、その代り隠れ蓑、隠れ笠と云ふて身体をかくして、どんを所へでも往かれる天狗の寶物を上げやう」

と云ひました

太郎は此話をきいて、一安心しました。そして天狗が采ころを欲しがらるのを見て、つひに天狗の寶物と交換しました。

さて、取り易へて仕まへば太郎はうれしくてなりません。飯粒で鯛を釣るとは、こんなことだらうと喜び早速仕事を片付け大いそぎにいそいで家に歸りました。

しかしあまり山深くまで行いておましたので道が掛りません、とかくするうち日は暮れてしまつて、家に歸つたときは眞つ闇となつてゐました。

「今かへつたよ」と呼びますと阿母さんが心配さうに出て見ぬまして手燭のあかりで入口を照らしました。太郎は急いではいらうとしますと、其出合頭に手燭にぶつかり、其とたん、

太郎の着ておました簀笠に火がうつり、アツといふ間もなく、パツと燃えてしまひました。

さあ大變、太郎は、折角寶物を手に入れ、これから一つ面白きことを仕やうと思つておましたのに、残念にも之を焼いてしまひましたので、力を落し青くなり、途方にくれておました。併しいつまで考へても仕方がありません。せめては此灰をりと、どうかなるまいかと、思つて其灰を身体にすつかり塗りつけました。すると矢つ張り天狗様の寶物だけあつて、其利き目は灰になつても無くなりません、太郎の身体は、すつかり隠れてしまひました。

阿母さんは驚いて

「太郎。太郎。太郎はどこへあるか」

「こゝにゐるのに見えないか」

「ちつとも見ぬませんよ」

「ぢや、しめたものだ」

と、太郎はまた元氣づいて、すぐ駈け出しました。しかし太郎を見付けるものは一人もありません、太郎はかねて自分の欲しいと思ふものを何やかや、近所の店から盗んで來ます。近所の店では時々、品物が無くなりませんが、誰とて之を奮つて行くものを見つけたものはありません。この様にして二三日の間は、近所のもものは不思議なこともあるものだと思つておました。

さて、ある日のことであります、太郎はた菓子を食べたくなり、おましたので、菓子屋に行つて菓子を食べかけました。いつものように太郎を見付けるものはありません。太郎はあちらの菓

子を食ひこちらの菓子を食べましたので、其店のものは、誰も居ないに菓子が無くなるのを不思議に思つて見てみました。太郎はまずく乗氣になつて食つてゐましたが、どうしたはずみか指先まで話めましたので、指先の灰が落ちてしまひました。灰が落ちて見ると、最早隠れることは出来ません、誰の目にも指先が見ゆる様になりました。菓子屋のものは目早く其指を見付けました。

「最前から菓子が無くなると思つてゐたら此指が奮るのだ。たゞは置かぬぞ」

と棒でピシヤリ 擲りつけました。太郎はアア痛つと悲鳴をあけました。そして思はず涙を流しました。涙が流れると目もとの灰が流れ落ちましたので、こんどは目が誰にも見ゆるやう

になります。「こゝに目が居る」と 又ピシヤリ 涙が顔中に流れます。こゝに顔があるピシヤリ。打たれて手から血が出る。ここに手があるピシヤリ。ここに足が見えたピシヤリ。太郎はさんぐな目に逢ひました。

辛うじて逃げのびましたが、涙やら汗やら血やらで、隠れ簾の灰は残らず流れてしまひ、もとのあはれな有様とあつて家に歸りました。そして

「これといふのも私が悪いことをした罰だ」と云つてこれからは博打をうつことも止め、悪いことをも止めて博打の太郎は正直ものゝ太郎と變つたと云ふことであります、めでたしく。

●をどん女郎

今は昔、氣高郡の立見峠といふにねごん女郎と云ふ狐が住んで居まして、人をばかし、頭をくるくると剃りおとすことが度々ありましたので、村の人達は皆之に困りました。

ある日、村の庄屋の家にふる舞がありましたして、村の者ともを招いて酒を飲ませました。色々の話の末に例の狐の話が出ました。

主人の庄屋が「誰か」と彼の狐を退治する人があるから褒美をやらうが、誰か退治する者はあるまいか」と云ひました。

するとその席に居た若者二名は、かねく少くばかり力のあるのを鼻にかけて居る連中でありましたが、「それを退治するなん

どは朝飯前の仕事です、私等か屹度、退治して目にかけてます」と受合ひました。が、座中の人々は、皆あやしい事だ、よせばよい位に思つて内心で笑つておました、なぜなればこの人達は少々軽率であつたからであります。

二名の若者は、この晩、家に歸りますと直ぐ、鎌を腰にさししこ踏んで立見峠へ往きますした、すると果して、黄金色をした年より狐、形状は犬程に思はれますのか、ぶらぶら歩きしてゐます。

太郎作は、つれの治郎作に向つて「居たわい居たわい」と話しかけますと、治郎作も「居た。く。あんを奴に騙されてたまるものか」と合槌をうちます。そして暫時見て居ますと、狐はハツと變つて若い婦に化け、それから道端の小さい石地藏を抱

きあげ、谷川で水草を付けたかと思ふと直ぐに赤兒に變へて了ひました。そしてそれを背中にねんぶしました。

貳人の若者は「こいつ、どんな事をするか見てやらう」と、その跡について往きましたが、狐は一向、氣付かない様子でありました。

何町か往きますと、ある家につき、戸を叩いて開けて貰ひ、そこに入つて仕舞ひました。

「畜生、何してやがるか」と戸の隙から覗いて見ておますと、爺さま婆さまが、大層喜んで今の婦と赤兒をもてなしています様子、全く子や孫と思つてるらしくあります。

貳人の若者は此様を内て思ひますには、「可哀そうに、爺さま婆さまは、狐にばかされて居るのだ、どうかして教へてやり

たい」と、尙様子を見てます中に婆さまが外へ出ましたので、太郎作は走り寄つて「實はこれ〜でござる」と、告げましたが、婆さまは少しも信せず取り合ひません、治郎作も口を添へて今見たあらましを話しましたが、婆さまは、どうしても承知しません。だん〜外の聲が高くなりましたので、家の人々は何事が起きたのかと、出て来て、どうしたのだ、と問ひました太郎作と治郎作とは、さきの事を繰り返して「今この家に入たのは、狐の相違ありません」と云ひましたが、家の人々も、氣狂だらうといふて取り合ひません。太郎作、治郎作も仕方なく「それほど私の言ふことを疑ふなら、今の赤子を釜に入れて煮ごらんなさい、すぐ現はれます、あの赤子は實は石地藏であります私があるこれいふ程のこともありませぬから」

と云ひました。こゝに至つて爺さまも少し疑つて來、婆さまの止めるを聴かず、釜煮にして見ました。すると赤子は釜の中から大聲を出して泣き出した。幾ら煮ても矢つ張り赤子でありますので、太郎作、治郎作は、怖くて怖くて、どうしたらよいかわからなくおつて來ました。爺さまは眞つ赤におつて怒り「この野郎、太い奴だ、何の遺恨があつて、おれの可愛孫を殺した。さあ只はおけない、奉行所へ訴へてやるから一緒に來い」と手を引いて無理に連れ出しました。

太郎作、治郎作はまつ青になりましてブルブル震ひ「どうぞ赦して下さい」と地べたに、座りこんで動きません。が、爺さま婆さまは聞き入れず「どうしても奉行所に訴へなければなら

ない」と力んで居ります。

この時、丁度こゝを通りかゝつた和尚さんがありました。年はとつてましたが、珠數を手にし、お經を誦みながら來ました。が、今この騒ぎを見まして「何事だ」と尋ねました。家の人々が今斯く斯くのことと、と仔細を語りますと、和尚は法衣の袖口を搔き上げながら

「われは素と、衆生を濟度し、慈悲を施し、善根を樹つるをつとめとして居るものでござる、この場合只は過ぎられませぬ。皆々よう聞かされ、この太郎作、治郎作を罪にたどした所で一度死んだ子供は、また生きはしない、で、この若者を奉行にやつて罪人にするよりは、寺に入れて法師にして死んだ子の爲めに冥福を祈らせるがよいではないか、さすれば死んだ子も浮ば

れる道理、どうでござる」

と懇に説いて聞かせましたので、爺さま婆さまも、その道理に感じて拒まれもせず、僅に二人を許しました。和尚は「善は急げといふから」とすぐ二人をつれて道を引返し、寺に歸り「この様のことの起るのも前世の因果快く佛門に歸依するがよい」と、よく説ききかせ頭を剃つて坊さんにしてやりました。二人は坊さんになつて木魚を叩き、赤子の爲めに念佛を稱へて経夜拜んでやりました。

時過ぎて、「太郎作やあい」、「治郎作やあい」と大きな聲で頻りに呼ぶものがありますので二人は驚いて目を開いて見ますと和尚も、寺も無く家もなく爺婆もなくあたり茫々たる草原の中で村のものが貳人を捜してる聲でありました。「こゝはどうし

たのか」と、大いに怪み手で頭をすりと撫でて見ますと、いつの間にか剃られたか、一本の毛もありません、手に持つてゐるのは竹の先に馬糞をつけたものでありました。これ全く例のねとん女郎が化かして、髪を剃つたのでありました。

◎盗人の悔悟

今は昔、米子町に正直な爺と婆とがありました。爺は毎日朝早くから田圃へ出て働らき婆は畑に出て野菜物をつくりて、かつく世を送つてゐました。だが正直ものでありますから多くの人に大事にせられてゐたのであります。こんな正直な爺と婆とでありますに、世の中には随分悪いものもあります、或夜盗人が此家をねらつて入つて來ました。爺は物音をきゝつけて、これは必定、賊がはいるに違いない。これ許すものかと身構へして待つてゐました。そのうち婆も目を覺して見ますと此仕末であります、婆は爺さまをたし止めまして、さて賊に向つて、

「ようこそ、た出にふつた。さあ。ずつと入りかさい」
 賊は此聲を聞いて見付けられたと思つて驚いたの驚かないのつて、跡をくらまして逃げ出さうとしました。婆はこれを止めて「いや、驚かれる程のことばはない。定めと暮し向に困つてゐられるのだらう、遠慮するには及ばぬ。」
 といふと。賊は逃げるにも逃げられず、もちぐゝゝてゐます。婆は「晝、來ることが出来なで夜分お出になるのは、よく〜仔細のあることであらう。出來ることなら澤山のた金も上げたいが御承知の通りの貧乏家だから貯蓄といつてもない。しかし飯などはこゝに澤山あるからこれでも食べてた腹をこしらへなさい」

といつて飯を食はせた。賊は塀の壁を破つて入つたのでありま
したから、婆は其塀のくづれを指して、

「ア、彼處の壁が破れてゐる、明朝、近所の人が見付けると
面倒だ、大儀ながら元の通りに繕ふから手傳ふて下され」

と云つて壁のやぶれを元々通りにしました。

爺さまは始終だまつて見てゐましたが、婆さまが色々と賊に
話して聽かせる様子を見又賊が感心して婆さまの云ふことを見
て、思ひました。

「私が悪かつた。盗人だからと云つて悪い心ばかり持つてゐる
ものではない。それを私が打つてやらうと思つたのは悪かつ
た。元々よい人間なのだ、是は親切にしてやらねばならぬ」
と言つて奥へ行き少し許りの貯蓄の金を持出しまして、賊の前

に置き、

「何か御馳走でもして上げたいが、夜中のことで何もすること
が出来ない。これは少しだが酒手にしなさい」
と云つて賊にやりました。

賊は打たれるかと思つてゐましたに、今此爺さまと婆さまの
親切な語に感じて、自分の悪かつたことを幾度もくく申しまし
た、

「まことに濟まぬことでありました。今こゝで打たれ擲かれた
つて、何共申し様がありませぬに、御親切な教をいたゞき又
御金までも戴くと云ふは何たる冥加にあまることでありませ
う。これから後は、キット改心いたします。再び泥棒など致し
ませぬ」

と誓ひました。

後久しく此泥棒は姿を見せなかつたのであります。數年の後立派な商賣人になつて澤山の土産物を持つて正直爺さんの所へ御禮に來たと云ふことであります。

◎ 經藏坊

今は昔、鳥取城の久松山に一疋の狐がゐました。狐は中々悪がしこいものでございますが、この狐は至つて柔順しい、智慧のあるのでございました。其名を經藏坊と申します。

經藏坊は久松山に住んでゐるのでありますから其處の殿様に仕へて殿様の御用なら何でも叶へるといふ忠義者でありました。經藏坊が一番よく勤めることは飛脚の代りをするのであります。昔は今と異つて交通が不便ですから何一つ用事があつても飛脚といつて人の使者を立てねばなりません。其節は絶へず江戸との間に用事がありましたから、飛脚は江戸と鳥取との間を往來します。しかしいくらよく歩くものでも二百里の道で

すから七日や八日には行き着くことゝ出来ません。ところが經藏坊は二百里の道を二三日で往復して來ます。殿様の御手紙を戴いて江戸に出でそして、それを御屋敷に届け返事を貰つて歸つて來ます。

ある時、いつもの様に殿様の御使となつて江戸へ向けて鳥取を出發しました。そして駒返峠を通り越し美作、播磨を云ふ國を通つて行きかゝりました。

播磨の國まで來ますと、ポンと鼻をつく妙な香ひがいたします。「ハテ今のは何であつたのだらう。」と、思案をしましたが一いや今は殿様のね大切を御用をつとめてゐるのだ。外の事を考へてはゐらない。」と思ひ返して又進んで行きました。しばらくすると又ポンと鼻をつく香がいたします。何の香かし

らんと考へて見ますと。何が扱、焼鼠の香ひであります。焼鼠は狐の大好物であります。「ア、焼鼠の香であつたか、大方罨が造つてあつて其餌に焼鼠がかけてあるのだ。恐ろししやくあの焼鼠を食つたら最後命はないのだ。さつさと行きますせう」と思つて、足を早めて進んで行きました。

足を早めて行きましたが、又どうしても其香が鼻をついて來ます。元來が好きな焼鼠でありますから、未練も残つたのでございませう。「まだあの焼鼠の香がしてゐる。少し許り食つて見たいナ。しかしあれは罨だ。食つてはならないのだ。」と。又行きかけましたが、「いや罨に限つたこともあるまい。一つ行つて試して見ませう。」と。折角、行き過ぎてゐましたが、又引き返して焼鼠のある所まで歸つて來ました。歸つて見れば旨さ

うな焼鼠であります。經藏坊は食はうか食ふまいかと思案して
 おましたが、畜生の悲しさ、つい食ふ氣になりました。一口食
 った。旨いと思ふ間もなく罨にかゝつてしまひました。
 鳥取では藏經坊が歸つて來ない。どうしたのであらうと。法
 印を呼んで見て貰ふと播磨で罨にかゝつて死んだ、と云ふこと
 が分りました。
 殿様は大層氣の毒なことに思はれ、矢つ張り罨にかゝつたか
 と。久松山の中腹に小さい祠を立て、こゝに祀つてやられまし
 た。

●湖山長者

今は昔、氣高郡に湖山長者といつて有名な金持家がありまし
 た。住宅は立派に建てらるべし、何一つ不自由といふ事はない。
 所有の田地は見渡す限り廣々として、稲の波をうつつてゐる。
 奴婢は澤山使つて、金銀財寶其數を知らない。食ふに方丈八珍
 の食あり、衣々に錦繡綾羅あり、といふ生活をしてみました。
 ある年の夏のことです。丁度田植の時分となりました。
 ので、其廣い田地に田植をさすといふことになりました。されば
 家の者ども近在近郷の者どもは、今日こそ湖山長者の田植の時
 だ、と勇みに勇んで、手拭をかぶるやら、裳を端折るやらして
 かひなく、早く田圃に出て行きます。長者は自分の家から其目も

届はぬ程の廣い田圃を見渡して、ひそかに自分の富と力とを自慢してゐました。

さうするうち晝にかり夕方になりましたが、名にしれう長者の田地でありますから植ゑても植ゑても果しがありません。と

うとう、日暮れかけてしまひました。

長者は此有様を見て、「今少し日が入らないと田植がすむに、残念なことだ」と思つて居ましたが、やがてつと立つて金の團扇を取つて來ました、そして日に向つてこの團扇を開き三度招きました。

ところが今しも山の端にかゝつて沈まんとする日が三段ばかりズツと上つて來ました。長者の勢力は甚いものであります、入日を磨いて之を止めました。さて田植の方では日が暮れ

かけてゐましたに又明るくなりましたから、思ふまゝに捲つて残らず田植を爲してしまひました。

其日は無事に暮れました。皆の人達は疲れて心地よく睡みました。長者も満足して睡みましたが、夜が明けて見るとどうでせう、さしにも廣かつた長者の田地は跡かたもありません。見事に植付けた稲の影さへ見えませんが、たゞ廣々としたる湖水であります、どこから湧いたともなく綺麗な水がたゞへて漣がザワ／＼と立つてゐます、植付けた稲は池の端に芦となつて動いてゐます。この池は湖山池と云ふのであります。湖山長者の土地は日を磨いた罰で一夜のうちに湖水に化けてしまつたのであります。

● 人助の熊

今は昔、伯耆の國日野郡に九衛門といふ樵人がありました。ある年の冬、いつものやふに山に入つて薪を採つておりましたが、今年は殊の外に大雪で馴れた山路ではあります、路も分らない位になりました。其内に日暮になりましたので九衛門は麓をさして歸りにつきました。足元の見える内に歸りたいと大急ぎで歩きました。其せいか足をふみ外して幾十丈とも知れない深い谷底に落ちて了ひました。そして積れる雪の中からだを埋められて起ることもどうすることも出来なくなつて了ひました。

九衛門はあまりの事にたどろいて、一旦は氣絶しましたが、

暫くしてゐると温い手でかざられるように思つて息をふき返しました。が四邊を見ますとまつくらで手にさはるものは雪ばかり一度死んで又活き返つたのと思へば喜ばしいに違ひありませんが、この上どうすればよいのか心元かく思ひました。

夜はだんくとふけるばかり、氣が氣ではありませんので、手さぐりに雪をかきわけやうとしますと、何だか分らぬ生ぬいものをつかみました、「何だらう」と考へますと、ぞつと怖れて齒もカチカチと震ひ鳴り、生きた心地はいたしません。大きい熊の手を握つてゐるのであります。

それにしても不思議なのは熊は荒々した様子もなく、手を伸べて九衛門の口の邊に當てます。九衛門が思ひますには、「ころなつてはどんかに氣をもんでも、たれの命は熊次第、なま

じ敵對して殺されるよりは、どうせ死ぬなら、れとなしく一命をさし出さう」と決めました。又、熊は、夏の日、手の平へ蟻をつけてたいて、冬の備へにするとの事も聞いて居ましたので、若しやと思ひ、そのさし出した手の平を怖々ながらなめて見すまると、大層甘くあります。又なめましても熊は怒りもしませんので、頻りなめますと、お腹のひもじさも自然に忘れる程でありません。

熊の様子で考へますと、我を害しやうなどの、心は無いらしいと信しまして、少しは安心しました。そして其案内について、岩穴の中に入り熊に身をひつけて、一夜をあかしました。

あくる朝起きては見ましたが天地四方たゞ眞白の雪ばかりで何れも自分の家の方とも當てなく、もしや人聲でもしないかと

耳をすまして聞いて見ましたが遙か下の方の谷底に、どうくくと瀧の水の響く聲より外は、小鳥の聲さへもきこえませんが、仕方がありませんので、毎日熊の手をなめて、何十日といふことなく暮しました。しかし家へ歸りたい、家へくと思はない日としては一日もかかったのであります。

ある、日和のよい日でありました。熊が丸衛門の袖をくわへて引き、ついて来いといふ風に見へますので、其まゝ従いて一里ばかり雪をふみ分けますと、初めて人の足あとある所へ出くはしました。そこに至りますと熊は用が済んだといふ風で、元來の方へ歸らうとしますので丸衛門は熊のからだに抱きつきずがりつき、「れ前は私の命の親、情ない獵人に見付かつてあたら命を無くすなよ」とかき口説いて別れましたが、いとゞ別

れを惜まれて、熊の山合に隠れるまでは。のび上りく見送り
ました。

これから、やつと自分の家に歸りましたが、家には村人が大
勢集まつてゐて、何か法事の様子でありました。今、九衛門が
入つて來たのを見るより、皆々、「それ幽靈が來た」と、にげ
るやら、かくれるやら大騒ぎになりました。

九衛門は合点ゆかず、之れをせし止めまして、「私は幽靈で
もなんでもない熊に助けられてこれく」と初めて今日までの
ことをすつかり語つてきかせました。すると 皆々は

「今日は九衛門どんが家を出てから四十九日め、もう此の世に
ない人とあきらめぬ寺の和尚を頼んで法事をしようとしてた
のんだ」

と云ひますので。

「それなら法事の代りに、歸つた祝の酒も酒もり」
と九衛門が先きになつて、大酒宴を催し、家の人々は勿論、村
中の人まで喜ぶ歌ひ和尚さんさへ法衣をぬいで酒をのみ、夜の
ふけるも知らないで賑かに陽氣に祝ひました。

さて村人達は九衛門の話ときいて熊の親切に感心し、これか
らは村の獵人は熊を捕らない様に仕様ではないかと相談して、
これから後は、一切、熊は獵らないことに決めました。

又、九衛門はあの山の熊は私の命の親であると言ふので、毎
年、其山の熊に、色々の食物を持って行つて大岩の上に置いて
歸るのでありました。其後、九衛門は其熊に一度も出會ひま
せななんだ。しかし九衛門は死ぬるまで熊の恩義を忘れなかつた

と云ふことであります。

◎種ヶ池物語

今は昔、因幡國宮下村といふ所に、名高い長者がありました。其界限きつての長者でございませうから、多くの田畑山林を所有し、又多くの下女下男を使用して、何不自由なく裕かな、生活をしてゐました。

或時、細川村といふ所から一人の下女を雇入れました。此下女は頗る美目よく顔かたち何一つ点のうち所のない嫽致よしであります。此長者のうちでは夜になりますと、多くの下女下男も、仕事も済みませうから、大勢が、圍爐裏の側に集まつて、世間話を初めます。かの嫽致よしの下女は、たねと云ふ名であります。衆のものは、たねさんくと云つて可愛がつて

やりますのでたねも悦んで衆の人と色々の話をするの例でありました。

多くの下男下女が集まりますと、時には、何か旨いものを食はうではないか、と云ひ出す者があります。すると、忽、其相談が纏つて旨いものを食べるのであります。種も何時も此相談にのるのであります。或日又此相談が纏つたのでありましたがたねは、ふと、主人の家を出て何處かに行つて了ひました。暫くすると、多くの柿の實を持つて歸つて、衆の者も食べさせました。衆は大そう旨がつて食べたのであります。

この様にして、たねは、度々何處からともなく柿の實を取つて来て、下女下男に分つて食べさせました。初めの程は、誰も不思議には思はなだったのでありますが、度が重なるにつれて皆

々不思議の思をする様になりました。

或日、いつもの様に、たねは、柿の實を取りに行きました。かねく不思議に思つてゐる下男は、「今日こそ何處から柿を取つて来るか見届けてやらう」と、たねの跡を追うて。見届つかくれつ、従いて行きました。

所が、たねはそんな事とは夢にも知りません。湯山村の種ヶ池に着きますと、池の中に入り、泳いで池の中にある小島に着いて其島の柿の木に、よち上り、其實を採りました。

下男は三人まで従いて来たのであります。此有様を見て吃驚し、顔の色は、土のやうになり、手足もブルブル震ひ出したから周章で、自分の村をさして歸つて行きました。そして、息を切て申しますには

「たねは種ヶ池にすむ、蛇であります、美人と思つたのは、實は蛇でありました」と途切れ々に主人に知らせました。

主人はこれを聞いて非常に驚きました。どうする事も出来ません。たねは自分が怪物であることを見付けられたので、其夜ぎり二度と、主人の家には歸りませう。

ところがこの主人の家は、たねが去つてから奇妙に不仕合もつゞいて起ります。たねが居た時は、何もかも幸福ばかり續いてゐましたが、たねが居なくなつてからは絶えず不幸つゞきであります。音に聞いた長者でありましたが、山林、田畑、等もだんくと賣り拂はなければならぬ様になりました。

こゝに同じ村に又、一人の長者がありました。前の長者の山林、田地等を悉く買ひ取りましたが、此長者の家へ、満と

いふ老婆がありました。此、満といふ婆は但馬から出たものでありましたが、利巧なものであつたので人に敬はれてゐました。この満は、種ヶ池の話を知り、不思議に思ひ、毎年、村の子供を集めて、種ヶ池に参詣します。そして小餅一斗五升を持つて行つて、木の葉に乗せ、一個づつ池に投げ入れて、かの龍の女に献じます。餅は池の真ん中に出て、渦巻の中に入り込んで底に深く入つてしまひます。人々は益々不思議の事に思ひました。

或年の事でございました。非常な日和つづきで、野も山も一滴の水さへありません。田圃の稻は枯れるのを待つばかりであります。この時、村の人達は長者に相談をしました所が、長者は「ともかく婆の

満に相談しよう、と云ふので、婆に相談しますと、婆は、承知しましたと云つて、早速、種ヶ池に行つて龍女に祈禱をこらしました、多くの日、婆はこゝに籠りましたが、其満願の日には大雨が盆を覆すやうな勢で降つて來ました、村人は非常な悦んで多くの品ものを婆に贈つて、禮を申しました。

後、婆の満は、だんく年とつて腰かゞみ手弱くなつて、池に通ふことも困難となりました、或時これが最後だと思つて種ヶ池に參籠しまして、いつもの様に餅を獻じ龍女に向つて云ひました。

「妾も多年こゝに來ましたが、もはや年とつて歩行くことも出來ません、大方、これきりで此池に參ることは出來ますまい、されば何か不思議な事を見せて下さい。」

と祈りました。

暫くすると、どこからともなく風がサツト吹いて、四方の木々は時ならぬ音を出します。池の上一面に五色の波が動いて、水が湧き立つかと思はれるばかり、見てゐる中に、池の中央から大きな水柱が立つた、霧は四方に立ち罩め、風は寒く吹き渡つて、こゝに龍女の正体を現じました。

婆は此有様を見て感じ、家に歸つて人にも話し聞かせ、自分も思ひ出して、龍女の靈驗を信じ、事ある時には種ヶ池に祈つたと云ふことであります。

◎ 慾張り爺

今は昔伯耆の國のある村に爺さまと婆さまとが仲よく暮して
 あました。毎日の様に爺さまは山に柴刈りに行きます、
 ある日のことで御座いました。爺さまは「今日は山深く行つ
 て柴をどつさり採つて歸りませう程に婆さま御辨當に團子をし
 っかり拵へて呉れないか」と云ひますと、婆さまは早速、澤山
 のれ團子をごしらへて爺さまに持たせました。
 爺さまは團子を腰につけて山深く柴刈りに行つたのでありまし
 た。丁度日和はよく鳥はあきまこと、長閑な日でありました。
 朝から柴を刈つて大分澤山とれた。婆さまも喜ぶことだらう。
 だがお腹も空いたやうな。もう晝飯に致しませうと、腰につけ

た團子を出し傍の石の上に坐つて團子を食べかけました。
 ところがどうした機會か團子が一つ手からすべつて草原へ落
 ちてしまひました。爺さまはそこら草の中を探いて見ましたが
 團子はありません。ハテ不思議なこともあるものだ、しかし仕
 方が無いと又一つ腰の團子を取り出して食べかけましたが、又
 コロコロと草原の中へ轉げ込んでしまひました。爺さまはア、
 仕様の無い事だも一つ出して食べませう、と又一つ出して食は
 うとするとコロコロと轉ぶ。又一つ出して食はうとするとコロ
 コロ。又一つコロコロ、とうとう 残らず轉げてしまつて一つ
 も残りません。

爺さんは「ハテたかしもこともあるものだ」と思つて、こん
 どば一所懸命に草原を探して見ましたが、草原の中に穴があり

ました。爺さまは「ウン此穴の中に這込つてしまつたのだナ」と思ひまして、其穴の中へ腹ばうて這込つて見ました。這入つて見るとだんくくと奥は廣くなる、そして明るくなる。ますく深くはいつて見ると此處は鼠の世界でありました。鼠どもは大勢集まつて團子を食べたり話したり。一方では又餅を搗いたりしてゐます。そして鼠共は歌をうたつて、

猫さへ居らねば鼠は御繁昌、鼠は御繁昌ボツテントく。

と大そう浮かれてゐます。

爺さまは、私の團子はみなこゝへ落ら込んで來たのだ。鼠の衆にたのんで團子を返して貰はうと思ひ。

「もしく鼠さん。今此穴の上で私の團子がみを轉げて此穴へはいりました。此爺はまだ晝飯も食べぬのであります。どう

が團子を返して下さいませぬか」と申入れますと、鼠共は、さては先程食つた團子は此爺さまのであつたのだ氣の毒なことをしたと思つて、

「そうですか、それは氣の毒なことをしました。あまりうまさうなので衆で貰ひうけて食べてしまひました。しかし團子の代りにこれを差上げませう」

と。金やら寶物やら、衣物やら澤山持ち出して爺さまにやりました。爺さまは大層喜び幾度も禮を述べて、いそぐ家に歸り、婆さまに此次第を物語りました。婆さまも此話を聞いて非常に喜び寶物を神棚に納めるやら御燈明を上げるやら大喜びでありました。

此爺さまの隣りゝ慾張りの爺さまが住んでゐましたが、うす

くこの話をきいて羨しがり、其次第をきくに來ました。爺さまは正直ものですから有つた通り残らず話して聞かせました。隣の爺さまは喜んで早速家に歸り團子をしらへて貫ひ山へ柴刈に出掛ました。途中から思ひますには「鼠は大層多くの寶物を持つてゐると云ふことだ、これは猫をつれて行つて鼠を退治し残らず寶物を奪つて歸るのがよろしい」と又引き返して猫を一疋伴れて出掛けました。

さて山へ行つて例の草原に達しますと此爺は穴を探しまはつて其穴の中へ團子を入れつゞいて自分もはいりました。なるほど隣の爺さんの云つた通り鼠もある。穴の中だけども明るい鼠は

猫さへ居らねば鼠は御繁昌 鼠は御繁昌

ポツテントンく。

と云つてゐます。爺さんはこゝだと思つて、

「ソーラ猫だ」

と云つて猫を放してやりました。鼠共は大吃驚、上を下へと大騒ぎ走るやら馳けるやら行燈をひつくり返すやら。障子を破るやらして何處かへかくれてしまつてコトとも音がしませぬ。猫もそこらを歩きまはつて見ました鼠の影は少しも見えぬ。不思議なことに今は今迄明るかつた穴の中が眞つ闇になつてしまひました。どこが入口であつたやら、どちらが上の方やら一つも分りません。

あちらへ行つては頭をゴツン、こちらへ來ては頭をゴツン。足を踏みはずすやら、手を支へはずすやらさんぐな目に遭ひ

ました。どうかかつかして穴の入口まで返して来ると身体中は血だらけ、苦しさをこらへて家へと歸つて来ました。

家の方では隣の婆さん、もう歸りさうなものだと思つて門口に待つてゐます。程かきはるか向ふに爺さんの姿が見えました。婆さんはとび立つ程に喜びまして「お金を澤山貰ふて来たせいか、足のはかどらないこと」と云つてゐました。近くなつてよく見ると、どうでせう。爺さまは頭から足まで血だらけであります。

婆さまは驚きまして氣も遠くなるやうであります。

「爺さま、その血はどうしました」

と聞きますと、爺さまは、

「あんまり慾をして行つたものだから、こんな情無い目に遭つ

た」

と、ありし次第をきれぐに話しました。猫は何處へ行つたやら分らなくまつてしまひました。

附録 神話 ① 因幡の白兔

今は昔、すつとの大昔大國主神といふ神様がりました。

まの大國主神と申上げるのはもと山陰道の各地と御支配にあつてゐたのでありますが、天孫瓊々杵尊が御降臨遊ばす前にあたつて其國土を悉く天神に返上された徳の高い御方であまます。

さてこの大國主神にはお兄弟が大勢ございましてこれを八十神がたと申す位でありました。

或時まの八十神がたは、めい／＼因幡國の八上姫といふね姫さまをお嫁にた貰ひあさらうといふので揃つて因幡の方へ御旅行をなされました。其時、意地のわるい兄神さまたちは、大國主の神に向つて「お前はわたしどもの従者にあつて後からお出で」と仰つて、大きな袋をばね背負はせゑされた、その袋は重い／＼袋であつたから、自然歩くのが時間ごつて大國主神は他の御兄弟達よりも、すつと後れてお了いなされました。

さて先へいらつしやつた八十神達は、途でふと一匹の兔にお逢ひあされました、此處は今の氣高郡内海村の邊であります。見れば其兔は毛がなくて、痛々しげな眞裸ですから、何したのかと

れ聞きあさいますと、兔は、鱧と喧嘩をしてこんなに裸にされましたと泣く／＼答へました。

意地わるの神たちはこれを聞いて面白、此奴一つ椰櫛つてやらうと思ひなされて、

「それは憫然たのう。れれが毛の生ゆる法を教へてやらう。先づ身体を海の潮水へよく浸けて、うれから風の吹通す高い丘へ上つて天日で濡れた身体を乾かして居よ。さうしてゐると終にはきつと元の通り毛が生ゆるから」

と仰つて神様達は因幡の方へ行つておしまひあされました。

兔は長い耳をたてゝ聴いて居ましたが、おろかものですから、ほんどだと思ひ、仰つた通り潮水によく浸つて、それから丘へあがつて潮風に吹かれてゐますと、毛が生ゆるとあるか身体ぢうがピリ／＼ピリ／＼と痛くあつて堪らないから、其邊中ころげまはつてヒイ／＼泣いて居りまえた

處へ大きな袋を背負つて大國主の神様がれ通りなされました、御覧なされると、まづ裸の兔が丘の上で若しさうにヒイ／＼泣いて居ますから、憫然におぼしめして「わい／＼兔、お前何した」とおたづねなされると、兔は此方に向いて「お救け下さいまし私はもう死さうです」と悲しさうに

云つて轉けまはつて居ます。全体何したのかとおたづねなされると、
 兎が云ふには。私は初めは隱岐の島に住んでゐましたが、何うかして因幡の方へ渡つて見たいと思ひまして、
 ある時、海邊へ出て居ますと鰐が來ましたもろ、此奴を欺して因幡へ渡らうと思ひ「ふい〜鰐
 さん。汝の仲間と私の仲間と執らが多いか競べつことを爲てみようぢやないか」と云ひますと、鰐
 は欺されることは知らず、ろりや面白からうと承知しました。

ろこで私は鳥渡者へる客姿をして「可いことがある、かうしたら何たらう。鰐さん、汝は仲間
 の衆を皆連れて來て、此處から因幡まで海の上へ橋の様よあつてね並びあさい。
 私は幸ひと身が小さいから、其上をかけまはつて一つ二つ三つ四つと數へて見よう、ろうした
 ら、汝達の仲間の數が知れようら」と云ひますと、鰐はうつかりろれが可うらうと、仲間を皆
 集めて來て、ずらりと並んだので、因幡までまるで橋のやうにつながりました。ろれを見て、私
 はッラ「數へるよ」と云つて、一つ二つ三つ四つと數へながら、ひよい〜と飛んで渡つてと
 う〜因幡へ着いてしまひました。ろれから陸へ上るとき沈點つて居ればよかつたのに、つい「
 鰐の間拔めやい、欺かして因幡へ渡つてやつたわいわい」と云ひましたもんですから、「一番終結

おろた鰐が腹をたつて、ウヌといつて逃げる間もなく私を捕まへまして
 「おのれ失敬を奴め、一体なら生かして置ないのだが命だけは助けてやる」
 と云つてこんにち毛も皮も撈つて了ひました。

ろれから痛さ悲しさに泣いてゐますと、八十神方がお通りになつた。助けて下さるかと思ひの
 外、欺されてのへつて痛い目にあはされました。と話し了つて又をい〜と泣きました。

大國主神は根が慈悲深い神様でいらつしやつたから、あはれにねばしめして
 「泣いて居ても詮方がない。再一度、水でよく身體を洗つて、岸に生れて居る蒲の花を蒔いて其
 上へ寢轉んで見る。さうしたら以前のやうに毛も生れて痛い所も無くならうから」
 と教へてれやりあされました。で兎がろの通りに爲ますと、果して白い柔かい毛が充満に生れて
 來ました。兎は悦んで

「有難う〜。卿の様を正直を神様にはきつと何か善いことがございませう。八十神は先へれ出
 ちがひない」

と云ひました。
兎の云つた通りで、八十神方は八上姫の許へおいでなされても八上姫は厭がつて諸とをつしや
らぬ。

「私は大國主の神様の許へ参るのでございます」

と仰つたさき、八十神方を相手にはなされませんので、八十神達は、遙々來たのに、是では餘り
残念だ。と。皆で御相談をなされて、大國主の神を亡いものに爲てしまはうと云ふ悪い企をなさ
れました。

八十神達は大國主の神のいらつしやるのを待つて居て、かう仰いました。

を前さんは此の山の麓で待つて居なさい。此の山よは赤い猪が居る。私等はそれを逐ひ下すか
られ前さんは麓で待つて居て、其の猪を生捕りに爲て下さい、もし生捕にしない様なら、お前
を殺して了ふぞ」

と。それから八十神達は山の頂上へ上つて、ろまに在つた猪に似た大きき石を眞紅にある程、
火で焼いて、ろして山から眞つ逆様に轉がして落しました。

約束を本當だと思つて、大國主神は麓で待つておいでなされたもゑ、其焼石で大火傷を爲され
て、其場へ氣絶しておままひなされました。けれども幸いに母神様のお情で蛤貝の水をお塗り
なされたので、火傷はすぐ癒つて、お蘇生になりました。

すると今度はまた八十神たちが大國主を山の奥へ連れて行つて、大木の幹を茹矢と云ふ矢で割
りかけて、其割目へ大國主を挿んで、それから矢を取りはづしたから堪らぬ、大國主は割目に
びつしやりと挿まれて又氣絶してしまひなされた。がこれも母神様のお情でお蘇生なされまし
たが

「お前は此處に居ると、又々外の兄弟に妬まれて逃も長くは生さて居ることが出来せんぞ」
と阿母様が仰つて指圖して、とうとう素盞鳴尊のをいでなさる所へ大國主を逃して遣りなされ
ました。

ところが素盞鳴尊も凶の氣の荒いお方もゑ大國主の神を憫然とも思はず、蛇の穴や、蜈蚣の穴
へはうりこんだり、野邊へ遣つて其の野へ火を點けて燃したりして、さまざまとねいぢめなされ
ました。けれどもいつでも命の姫君か蔭へ廻つて救ひ出しをかばひなされましたから、大國主は

いつも危い難義を免れて出雲へ御歸りにありました。
 其時、持つて御歸りなつた弓矢の力で意地わるの御兄弟たちを遠くへ追散らしてをしまひあさ
 れて、やつと國中を、よいあんばいにお治めなされることになりました。めでたし〜〜。



此の本を御讀みにあつたら直に



郷土摸範人物 (昔の巻)

定價十五錢
送代貳錢



郷土地理と歴史

定價拾錢
送代貳錢

右の二冊を御覽實に有益なる良本です

明治四十四年十月廿二日印刷
 明治四十四年十月廿六日發行



發行者印



拾貳錢

著者 因伯史話會

右代著者

發行者 山敬次郎

鳥取市上魚町四十五番地

印刷者 船越莊治

鳥取市片原貳丁目貳拾貳番屋敷

印刷所 船越活版所

鳥取市片原二丁目二十二番屋敷

發行所

鳥取市大工町筋
振替大阪四二六九番

横山書店

鳥取市 博進堂

鳥取市 楠城書店

全 振替大阪八貳六五番

伯耆倉吉 振替東京六三〇五番 徳岡書店

全 振替大阪九〇叁五番

全 米子 振替東京一九五二番 今井郁文堂

全 振替東京二〇四九番

全 境 玉文堂

全 文尚島田書館

全 加島惠太郎

全 靜文堂

全 愛信堂

全 金居堂

全 愛信堂

267
351



新和漢洋書販賣



● 昔書販賣 ●

● 漢籍部 歷史、經書、諸子雜集	● 皇典部	● 歷史部 國書、武鑑、有職故實	● 國文部 國語、物語類	● 字書部 字引、節用、字類	● 歌書部 歌集、俳諧、發句	● 習字部 法帳、和漢石摺	● 畫譜部	● 隨筆部 地誌、名所、紀行、小說、くさ草紙
● 文章部 和漢文集、作文書	● 詩集部 和漢詩集、韻字	● 四民部 武家、兵書、刀劔、算法、古錢、農書	● 修養部 心學、傳記	● 卜易部 九星、方位、天文、家相、人相	● 本草部 漢法醫書	● 娛樂部 茶、花、碁、將碁、音樂、淨ルリ本	● 寫本部	● 雜ノ部

一本切買入 橫山書店 鳥取市大工町筋 電話三〇九番

